

ケニア共和国 派遣期間 2013年4月～2016年3月

ナイロビ日本人学校 帰国報告

～風に立つライオンからの教え～

稚内市立宗谷中学校

教諭 高橋 充

1. ケニア共和国について

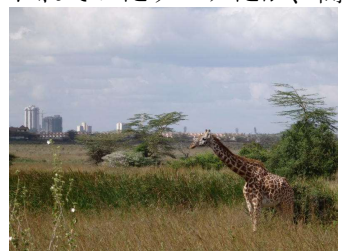
赤道直下、アフリカ大陸の東に位置するケニア共和国。面積は日本の約1.5倍で、約4,486万人（2014年：世銀）が暮らす国である。民族はマサイ族が世界的に有名であるが、人口比ではそれほど多くはなく、キクユ族、ルヤ族、ルオ族（オバマ大統領の父親）などが多くを占め、42の部族が存在する。習慣として、家長を重んじる習慣が残っており、年長者や老人を「ムゼー(Mzee)」と呼んで、非常に尊敬している。また、ケニアの人たちはよく、「ポレポレ（スワヒリ語でゆっくりという意味）」という言葉をよく使う。これは、何事にもあわてず、あせらず、ゆっくりとやっつけていこうという考えで、これを「ポレポレ精神」といい、ケニアの国民性を象徴している。また、別の国民性として、「ハラムベー（harambee！）精神」がある。この言葉は、「いっしょにがんばろう」という意味のスワヒリ語である。助け合いの精神や習慣は、親子兄弟姉妹だけではなく、親類縁者、村民同士、部族同士へと広がっていく。アフリカの伝統的社会の基本精神として、この「相互扶助」があることを知ることが大切である。



気候は、ケニアの国土の大部分が赤道直下に位置しながらも、変化に富んだ地形を有しており、標高と緯度によって全く違う。北部は乾燥地帯で、海岸部やビクトリア湖周辺は年中暖かい。ただ、首都ナイロビは世界で最も過ごしやすい気候と言われ、その所以は、内陸部で海拔約1,700mの高原にあるため、年間平均気温が約18℃と温暖で、北海道の夏の気温と同じくらいである。また、季節は日本のように四季はなく、大別して雨季と乾季に分けられる。雨季には3～5月（大雨季）と10月～12月（小雨季）との2回があり、この時季には、かなりの雨量になる。降雨は早朝と夜間が多い。ナイロビでは、9月から11月初めにかけて薄紫色のジャカランダの花が満開になり、町全体が薄紫色に彩られる。国土の多くはサバンナ地帯で、そこには多くの野生動物が生息しており、その動物たちを目当てに多くの観光客がサファリドライブを楽しんでいる。



経済成長は著しく、ナイロビ市内では至る所で、建設ラッシュが進んでおり、これが物価の上昇を招いている一因とも言われる。それが故に、貧富の格差も広がる一方である。また、ケニア国内の電力普及率は20パーセント台で、都市部に住んでいても停電・断水は日常茶飯事である。一方で、携帯電話の普及率はなんと80パーセントを超えており、低所得者層の人たちも所持している。治安は、正直良いとは言えない。独立後50年が経過、かつて「東アフリカの優等生」といわれていたケニアだが、高い失業率、諸物価の急騰、近隣諸国の政情不安等の影響を受けて、治安は悪化の傾向にある。特に、市内では夜間はおろか、昼間の外出の際でも安全のために近くの移動でも車を利用しなければならない。また、テロが起こることもあり、それに警戒しながら生活していかなければならないのも事実である。ただ、生活全般では、ナイロビは国連本部があるおかげで、各国の物が手に入り、生活には困らなかった。



2. ナイロビ日本人学校の特徴

ナイロビは、アフリカ中東部に位置するケニア共和国の首都であり、東アフリカの中心都市でもある。また、国連本部もあるため、さまざまな国の方々が暮らす街でもある。そのナイロビにある日本人学校は児童生徒数がおおよそ40人前後が在籍し、保護者の多くは、JICA、大使館、商社、NGOの機関で働いている方々で、家庭的な雰囲気が漂う学校である。



ナイロビ日本人学校の特徴ある教育は

- English の授業・・・外国人講師との英会話を通して異文化に触れながら、実践的な英語力とコミュニケーション能力を養う。4人の講師が週に3時間、習熟度に合わせたグループ学習をする。
- Jタイム・・・各学年部でテーマを設け、体験的な学習活動を通して、課題を解決する資質や能力を養う。また、現地校やインター校との交流や校外学習を通して、子どもたちの国際感覚を育てる。
- 国際理解教育・・・日本と異なる文化に触れ、さまざまな人と交流し、互いを学び合う。そして、日本の文化への理解を深めるとともに、心豊かな子どもを育てる。
例：ナイロビアカデミーとの交流（七夕集会・学校訪問）
カルチャーディ・グローボールディ（外国人学校との交流）など
- ジャリブタイム・・・週に一度のクラブ活動。日本人会や保護者の協力でスポーツや音楽、芸能などにジャリブ（スワヒリ語で挑戦）する機会がある。

3. ナイロビ日本人学校での実践

〔1〕ナイロビならではの体験学習

☆職場体験学習

ナイロビ日本人学校では、毎年、中学部において職場体験学習が行われている。日本で行う職場体験とは若干異なり、中学部所属生徒が全員が同じ職場で、1日を通した活動を行っている。その内容を踏まえながら、生徒たちがどのようなことを学び、その後の生活でどのような変容があったか、その成果などをあげていきたい。

(1) Nyumbani Children's home での実践

初年度は、私が担当していた家庭科のカリキュラムに関連づけて、保育実習を職場体験学習として実施することを決め、その事業先を Nyumbani Children's home に決めた。その施設は、HIV(Human Immunodeficiency Virus：以下 HIV と略す) 孤児院であり、子どもたち全員が HIV に感染しており、親の事情で施設に預けられている。なお、事前学習において、アレンジしていただいた現地日本人スタッフの方からこの孤児院について学ぶ機会を設け、ケニアにおける HIV 事情や HIV についての基本知識を学ばせた。



そこでの活動は、

- ①園内清掃と昼食準備～実習が始まる前に与えられた仕事で、2つのグループに分かれ、園内を清掃する班と、園児の昼食で出される豆を分類する班に分かれて活動した。
- ②保育実習～自分たちで考えて、計画を立てて活動した。遊び道具なども自分たちで作成し、園児と交流した。事前に作成した段ボールハウスや、新聞紙で作成した野球道具などを持参してふれあい活動を行った。

- ③施設内の子ども部屋の清掃、靴洗い～グループに分かれ、子どもたちが生活している部屋の清掃と、子どもたちが使っている靴洗いを行った。活動では時間が余り、子どもたちとのボール遊びなどの時間に充てた。

実習当日は、それぞれの生徒たちが意欲的に活動した結果、園児たちがいつも以上に喜んでいただいていた。特に、孤児院の先生は、日本人学校生徒たちの積極的なふれあい活動の結果、今まで笑顔すら見せなかった子が、元気な姿で中学生と一緒に遊んでいたことに、感激したようであった。この取り組みの後、施設の方々から、もう一度来て欲しいとの要請もあり、お互いにとって意義のあった取り組みであった。

(2) KWS (Kenya Wild Service) での実践

次年度は、動物と関わる体験学習の企画を立てた。ケニアにいとサファリなどで、動物を見る機会が多々あるが、そこで働く人たちがどんな仕事をしているのかを知るだけでなく、動物にふれあう機会を設けたいと思い、KWS に職場体験学習をお願いした。KWS 内には動物孤児院があり、そこは病気になった動物や親と離れてしまった動物を保護する施設である。ここでの活動も、前年と同じように、現地日本人スタッフをお願いして、事前学習を手伝ってもらい、職場実習に取り組んだ。また、KWS ではそこで働く海外青年協力隊の方にも協力していただき、職場体験だけでなく、生徒たちにこの職業に関する話をしていただいた。



そこでの活動は、

- ①園内清掃～この施設は一般客も訪れる施設で、広い園内を何回かに分けて、落ち葉集めなどの清掃活動を行った。仕事の合間では、動物にふれあう機会も設けられ、日本では滅多に味わえない体験も行った。
- ②海外青年協力隊の方と交流～昼食後に、各自が質問を用意し、協力隊の方が答える形式で実施した。
- ③動物たちへの餌やり～この活動の前に、動物孤児とのふれあいの場が設けられ、障がいをもったキリンへミルクを与える活動などができた。また、ライオン・チーターなどの肉食動物に餌を与える活動は、日本では絶対に経験できない機会でもあり、貴重な時間を過ごすことができた。

この活動では、コミュニケーションを苦手とする生徒が、動物孤児と接していくうちに、表情が明るくなったり、また、英語が苦手な生徒も、意欲的かつ率先して作業に取り組み、現地職員からも大きな評価を得ていた。この実習を終えた後は、どの生徒も達成感に満ちた表情で、後輩児童からはこの活動についてうらやましがられていた。また、職業観のみならず、動物孤児に対する愛護精神の意識付けにもなる活動になった。



(3) Uchimi Super market での実践

最終年度は、日本でも行われているような職場体験学習を考え企画した。さまざまな職種がある中、流通（小売り）に焦点をあててみた。ただ、この年度は生徒数も増え、1事業所では人数が多いため、2カ所に分けた。この学習を実施するにあたって、事前学習において、現地日本人スタッフをお願いして、働くにあたっての心構えやケニアの職場事情を生徒たちに教えた。



当日は、スーパー全般の仕事をお願いし、レジ打ち、レジ補助、品だし、店内清掃、検品、棚清掃、青果選別、ベーカリー手伝いなど、各担当者の指示の下、実習に取り組んだ。この実習ではケニア人

店員の下での活動であったため、英語を話さなければならない状況であったが、私を含めた日本人の補助を入れずに、自分たちで聞いて、率先して活動に臨むといった形態をとった。この試みは、事業者側にとっても初めてであり、活動中にレジで励まされる生徒や、顧客の中には初めて見る光景に、「Wonderful experience」と賞賛してくれた人もいた。

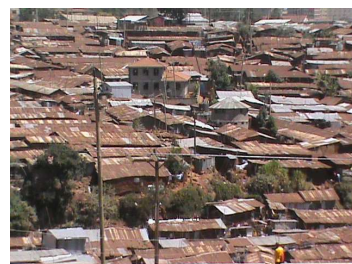
普段利用している施設を裏側から見る事ができた今回の学習は、最初は、乗り気でなかった生徒も、活動していくうちに「働くこと」の意義を学べたようだった。生徒たちからの感想にも、働くことの大切さやありがたさを感じていたようで、後日、保護者からもこの取り組みを評価する声をいただいた。

☆ボランティア学習

ケニア・ナイロビで最も実践したかったのが、ボランティア学習であった。NGO 団体などの活躍を見かけてはいるが、その人たちがどんな活動しているのか、また、中学生にもできるボランティア活動は何かを考え、周囲の協力を得て実現した。

(1) Anajari school での実践

2年次の3学期にキベラスラム近くにある Anajari School へボランティア学習を企画した。私の思いとしては、「ナイロビに住んでいるからこそできること」を生徒たちに体験させたかった。ナイロビには世界最大のスラム街であるキベラがある。ただし、キベラスラムは治安上、絶対に立ち入ってはいけない地区である。しかし、その様子を映像などでは見る機会があるにせよ、そこで暮らす同世代の生徒はどのような環境で学んでいるのかを、実際に目にして感じて欲しいと思った。実習にあたって、警備員を同行させるなどの安全面に十分配慮した。また、活動ではボランティアだけでなく、交流という面も考えながら取り組んだ。



Anajari school はキベラスラムに隣接する地区にある私立の学校である。下見時に、説明を聞いたが、限られた予算の中での運営ではあるが、ここの学校の先生はそのような条件下でも教育熱心であることも伝えられた。この学校の多くの生徒はキベラより通っており、生活が苦しく、学費をまかなうのも厳しい家庭が多いのも事実であった。この学校は脇道に位置しており、通学路もケニア特有の未舗装のガタガタ道で狭く、日本での光景とは大きくかけ離れた環境下にあった。

この学校は幼稚部から8年生まで学年1クラス40名ほどであるが、教室は狭く、また設備も十分ではなかった。教室の大きさは日本人学校の教室の半分程度で、机は古い長机を再利用したものと思われる。建物はトタンで床は土であった。敷地も狭く、活動場所が限られていた。また、教科書は1冊を4～5人で共有していた。なお、8年生の生徒たちが受けている全国統一学力テストでは、500点満点中400点以上を取る生徒が半数以上を占めるが、残念ながら奨学金を受けて上級学校に進めるのは極少数で、自分たちの家計の問題から進学を断念せざるを得ないのが現状であった。今回の活動も現地日本人スタッフに事前学習より協力してもらった。



そこでの活動は、

- ①図書室整理～コンテナを再利用した図書室で、支援品として寄贈された本を整理していく作業を行った。狭い図書室での作業なので、6名以下で活動。埃などを取りながら、項目ごとに並べていった。

- ②授業補助、授業講師～図書室整理と並行して、ペアで1年生から4年生までのどこかの教室に行つて、授業アシスタントもしくは、先生として授業を行う活動を行った。主に、算数、社会、理科の授業で黒板の前に立って活動を行い、教える立場を初めて経験した。普段、おとなしい生徒も小学生の算数を親身になって手伝っていた。また、意欲的な生徒たちは、率先して日本について教えるなどの活動をした。ある授業では、その先生からも任せられていたようで、自分たち自身の英語を交えながら、1時間の授業に全力を尽くしていた。
- ③ソーラン交流～午後の時間は日本人学校生徒による南中ソーランを披露した後に、Anajari schoolの子どもたちと一緒に踊った。体育館もグラウンドもない中、限られたスペースではあったがお互いに精一杯踊った。この取り組みが大好評であつて、多くの児童生徒が、また踊りたいとの希望の声が聞かれた。

今回のボランティア学習は、ケニアにいながらにして、その実態を知ることが困難だった学校での活動することができた。自分たちの学校と比較して、身近に私たちとは違う環境で学校に通う子どもたちと接することができ、貴重な経験になった。物の見方や価値観が今までと変わったり、子どもたちの前で話すなどの活動が自信につながつたようであつた。



(2) Feed the children での実践

3年次の3学期にナイロビの町外れにある Feed the children へ保育実習も兼ねてボランティア学習を企画した。この意図として、乳児にふれあえることと、障がいについても学べるという点で取り組んだ。

この施設はイタリアの人たちが設立し、現在はオーストラリアの人たちがサポートしている施設である。ここで暮らす子どもたちは、生まれながらにして、親に見捨てられた子どもや、肢体不自由・知的障がいを持つ子どもたちで、小学校も隣接していた。施設は近代的なもので、ケニア人の寮母さんがそこで働いている。中には義足を必要とする子や、障がいの度合いで学校にも通えない子もいた。



そこででの活動も、現地日本人スタッフとともに事前学習を行い、以下の内容を当日行った。

- ①乳児ケア・・・新生児～2歳児くらいまでの子どもたちを、屋外で抱っこしながらふれあう活動をした。寮母さんに抱っこの仕方を教わりながら、ケアをしていた。最初は用心しながらふれあっていたものの、慣れると同時に優しい表情で取り組んでいた。
- ②幼児ケア・・・2歳児～5歳児くらいの幼児に対して自作のおもちゃを用いたり、屋外でおんぶや抱っこをしながら、ふれあい活動を行っていた。当初は手先を鍛えるためにも、折り紙を用意していたのだが、子どもたちが生徒たちと屋外での遊びを大変喜んでいたので、臨機応変に対応し、終始、子どもたちと遊んでいた。
- ③洗濯室補助・・・この活動は、特に手伝って欲しいと施設から要望された。各棟のシーツやタオルの洗濯など、比較的体力のいる仕事に取り組んだ。シーツやタオルの量などそこで働く人たちの大変さを実感できたと同時に、各棟の掃除に携わる中、部屋で義足を見たり、車いすでの生活を余儀なくされている子どもたちに会うことで、その施設で暮らす子どもたちの様子を知りうることもできた。
- ④フィーディング・・・乳児組と幼児組に分かれて、昼食の補助を行った。特に、乳児組はミルクを飲ませたり、離乳食を食べさせることにトライするなど、なかなか経験のできない活動を行った。また、幼児組も食べさせることに集中させようと、それぞれが工夫してフィーディングを行っていた。この頃になると、幼児たちはすっかり慣れており、親しく生徒たちとふれあっていた。

今回の保育実習は、乳幼児に接する機会を学ぶほか、障がいについても学ぶきっかけとなることも意図していた。生徒たちが、子育てを実体験することで、自分たちの親の気持ちを知ることになったと感じた。普段の生活で冷ややかな一面を見せていた生徒も、乳児とふれあうことによって、いつもとは違う和やかな表情を見ることもできた。この活動を通して、あらためて生命に対する畏敬の念をもてるようになったと感じた。

〔2〕 English 講師陣と作る授業

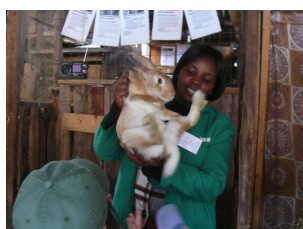
English の授業は、コース別に4名のケニア人講師が計画実施している。週に一度のミーティング時に打ち合わせをもって、児童生徒の様子交流やそれぞれのクラスの内容を交流したり、イベントなどを計画した。この授業は、基本的には個々の先生方に任せているが、英検対策や学習発表会に向けての活動、校外学習、Art とのジョイントレッスンでは私も含めた English に関わる先生全体で、計画段階からチームとして活動を行った。

(1) English trip

English の各学年部単位で年に1回、校外学習を行っている。English 講師陣が見学場所を選定し、それに関する事前・事後学習をしている。時には、学習発表会にリンクさせた取り組みも行った。この授業では、全ての説明が English で行われており、リスニング力を鍛える目的もある。また、English 講師陣が、ケニアならではの場所を選定しているため、社会見学の観点からも貴重な学習ともなった。

English trip の活動記録

| | 2013 年度 | 2014 年度 | 2015 年度 |
|------|---|---|--|
| G1&2 | Railway Museum (鉄道博物館) ～乗車体験あり | Rabbit farm (ウサギ農園) ～ふれあい体験実施 | Marula Studio (廃スリッパ [®] などを利用した土産店) ～ビーズ、マスク作り体験 |
| G3~5 | Maasai Treds (廃タイヤを利用した靴工場) | Kitengela Glass (廃ガラスを利用したガラス工場) ～ガラス作り見学 | KSPCA (動物愛護施設) ～ふれあい体験実施 |
| G6~9 | Riftvalley Leather (革製品の工場) ～土産に革製品 | KTN 放送局 (新聞・ラジオ・TV) ～スタジオ体験ツアー | 最高裁判所、KICC ～未公開施設見学、植民地時代の法廷を体験、ランドマークタワーの屋上からナイロビ一望 |



(2) ジョイントレッスン

1年目の3学期から実施。このジョイントレッスンは、English 講師からのアイデアで、Art の授業とリンクさせて、その時期に関するイベントを English と Art を合同で、English の各学年部単位で年に一度、各学期毎に学んでいこうと計画・実施した。

各年度の Joint Lesson プログラム 上からテーマ、内容、Art の製作活動

| | 2013 年度 | 2014 年度 | 2015 年度 |
|------|--------------------------------------|--|--|
| G1&2 | | Chinese New Year (3 学期) ビデオ学習とトレジャーハンティング 帽子作り | テーマ未設定 (3 学期) トレジャーハンティング 海中の様子的工作 |
| G3~5 | バレンタインディ (3 学期) クイズゲームなど カード作り | クリスマス (2 学期) クイズ大会 立体カード作り | クリスマス (2 学期) プレゼント交換会 カード作り |
| G6~9 | | 海の日 (1 学期) トレジャーハンティング 海中に関するアート作成 | オバマ大統領：祝来ケニア (1 学期) 国連やオバマに関するクイズ大会 国連などの旗作り |



〔3〕ナイロビを深く知る校外学習

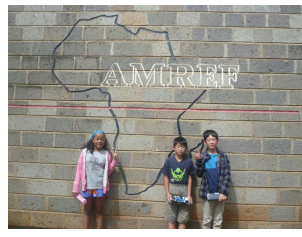
ケニア・ナイロビは、教材の宝庫でもある。日本とは違った文化や習慣が至るところで見られる。そこで、子どもたちと一緒にナイロビを学びたいと思い、さまざまな校外学習を企画した。英語以外に小学部 5 年生の社会を担当していたので、教育計画と照らし合わせて、その単元で可能な校外学習を計画した。実行するにあたっては、小学校の先生のアドバイスや過去の校外学習などの実績を参考にした。また、中学部では、思い出作りの意味も込め、市内探訪と称して、普段はなかなか行けないタウンを中心に巡り、ナイロビの良さを発見させるために校外学習を計画した。ケニアに長く住んでいる子たちでも、タウンへは治安上の問題で訪れる機会が少なく、この計画を実行するにあたっては、安全面に留意しながらも、実りのある学習になるように企画した。いずれの学習においても、オリエンテーションを授業で行い、事後活動ではレポートを作成させた。

(1) 5 年生社会科

見学場所と内容

| 単元 | IV 情報とわたしたちの暮らし | IV 情報とわたしたちの暮らし |
|------|--|---|
| 見学施設 | Citizen TV | Amref (African Medical Research and Education Foundation) |
| 内容 | ラジオ局 (ラジオ放送出演) ニューススタジオ見学 | フライングドクターについての説明と施設見学 |
| 備考 | <ul style="list-style-type: none"> ケニアの有名タレントのラジオ番組に生出演 朝の報道番組後だったので、ニュースキャスターから話を聞いた。 | <ul style="list-style-type: none"> 司令室の見学 東アフリカの医療の実態を聞くことができた。 |

| | | |
|------|--|--|
| 単元 | Ⅲ 工業生産とわたしたちの暮らし | Ⅴ 環境とわたしたちの暮らし |
| 見学施設 | GM East Africa | Green Belt Movement |
| 内容 | 工場見学 | 環境団体の施設にて、ケニアの環境状況の説明 |
| 備考 | <ul style="list-style-type: none"> 主に、トラック生産が主で、ケニアの工場では組み立てのみ。 部品が日本から輸入されることがわかった。 | <ul style="list-style-type: none"> この団体は、ノーベル平和賞を受賞したワングリ・マータイさんが設立した環境団体 ケニアでの環境汚染の実態のほか、Green レンジャーという植樹の啓蒙活動を行っている。 |



(2) 中学部市内探訪

第1回目

| 訪問場所 | 内容など |
|--------|---|
| 国会議事堂 | <ul style="list-style-type: none"> 安全面を配慮して、アスカリ（警備員）に同行してもらいながら、タウンを歩いて、国会議事堂へ。 実際に、議事堂内の聴講席にてケニアの政治の話などを中心に聞いた。 |
| ウフルパーク | <ul style="list-style-type: none"> ノーベル平和賞受賞のマータイさんたちの運動で残した緑ある公園にて昼食。 |
| KICC | <ul style="list-style-type: none"> Kenya International Convention Center 略で、市内を一望するランドマークタワーから、ケニア市内を一望した。 |

第2回目

| 訪問場所 | 内容など |
|----------------|---|
| 国連本部 | <ul style="list-style-type: none"> 国連のスタディツアーに参加。 JICA の写真展示会も開催されていた。また、PKO 活動についての説明や、国連についての説明などを受けて、施設内を見学。 平和について考えさせられるモニュメントでは、これからの世界平和について説明を受けた。 |
| Teriyaki Japan | <ul style="list-style-type: none"> トリドールが2014年にケニアに進出し開店した日本食ファストフードレストラン。 そこで昼食を取りながら、店で働いている日本人従業員に職業観を中心とした質疑応答を行った。 |
| 古文書博物館 | <ul style="list-style-type: none"> ケニアの歴史を学習するための施設だった。 小泉元首相や皇太子殿下がケニアを訪問されたときの写真が飾られていた。 古文書博物館前で開催されていた風刺画展は見応えがあった。 |



〔4〕ナイロビでの国際交流学習

ナイロビ日本人学校では、国際交流教育の一環として、現地校との交流事業がある。低学年部では、隣のナイロビアカデミーの低学年部と交流活動を行っている。かなり前からの姉妹校提携を行っているキリマニスクールとの交流もある。その他にも、人数規模の同じような各国人学校との交流もあった。また、新規開拓で、中学部生徒を対象に、Light Academy Secondary との交流学習も行った。

(1)カルチャーディ

この行事は数年ほど前より、オランダ・ノルウェー・スウェーデン・フランス・ドイツ人学校の持ち回りで行われていた。私が赴任した年度はホスト校であるスウェーデン人学校とコンタクトを取りながら行った。参加対象は4年生～6年生であり、今回の参加テーマが物語ということで、日本人学校ではEnglish 講師陣と協議した結果「花咲か爺さん」を英語劇で演じ、その後で、日本語で「花咲か爺さん」の歌を一緒に歌わせた。最後に、サイン会のような感じで、各国の子どもたちの名前を聞いて、その名前をカタカナで書いてあげるという取り組みをした。この行事は、各国の子どもたちと一緒にグループで各国ブースをまわり、それぞれの国の活動に、交流しながら、参加する取り組みであった。昼食は各国の学校で用意された料理を楽しんだ。



(2) グローボールディ

このグローボールという言葉はグローバルとボールを掛け合わせた造語で、ドイツ人学校の体育の先生を中心として、各国のニュースポーツでの交流を図ろうと始まったものである。日本人学校は過去、行事と重なっていて、参加を見合わせていたのだが、私自身、この活動に興味をもち、この年度から参加することをお願いした。この年のホスト校はノルウェー人学校で、English 講師陣全員と体育科の先生に参加してもらった。



次年度は、日本人学校が主体となってこの行事を取り仕切ることとなった。開催は11月であったが、1学期から案を練るなどの活動に入った。開催にあたって、長い説明が不要でルールが簡単で、小さな子どもたちも楽しめる活動考えた。偶然にも、体育科の先生と、行動を共にすることが多く、通勤途中でもそれを話題にしてお互いの案を出していた。また、地元のニュースポーツを調べて参考にした。2学期に入り、体育科の先生と案を詰めていった。4種目ぐらいの候補を考え、まずはドッジボール、キックベースを最初に考えた。また、地元のニュースポーツを参考に、ソフトボールカーリングを提案した。4種目の選定に当たり、場所などを考えるといいアイデアが思い浮かばず、ボール競技から離れて、しっぽ取りではどうかと提案された。開催の一ヶ月前に、デモンストレーションを行い、ルールなどについて考えてみた。わかりやすく、かつ面白さがあるということで、ソフトボールカーリングは両サイドから投げる方式で、球の形をいろんな種類に分けて行うことにした。また、キックベースは柔らかい小さめのラグビーボールを使い、ベースを6カ所に分け、ピッチャーサークルに戻すと進塁できないなどのルールを決めた。これは、昨年度のノルウェー式ソフトボールに似た形であった。しっぽ取りと、ドッジボールはそのままのルールで行うことにした。その後はルールなどを翻訳し、English 講師陣に審判をお願いし、English の活動の中で、子どもたちにルールを把握してもらい、それを他国の子どもたちに説明するという練習も行った。また、準備活動も生徒の手を借りながら行った。なお、今回の参加対象を3年生以上中学生まで広げた。



当日はドイツ・フランス人学校の以外の子どもたちが集まり、大イベントとなった。各国の先生方も多く集まっていたが、混成でできたチームの子どもたちを見守っていた。先生たちからはどの競技に対しても賛辞をいただき、子どもたちも国や人種に関係なく、楽しく競技に向かっていた。また、日本

人学校生徒からも、競技を楽しむだけではなく、インター校から転入した子にとっては、同世代の子どもたちと英語で会話をできたことが喜びとなっていた。PTA に用意してもらったスナックタイムを挟み、全競技終了したときには、他国の子どもたちが親しげに来てくれたのは担当者としてもうれしかった。また、最後にデモンストレーションとしての中学生による太鼓披露は、他国の子どもたちが感動していたようだった。各国の先生方からも子どもたちが帰校後に、「楽しかった」との報告を受けて、日本人学校に感謝のメールを送ってくれたり、その学校のブログに掲載していただいた。



(3) Light Academy Secondary 交流

2015年度はカルチャーディやグローバルディの交流がなかった。しかし、私の住んでいるコンパウンドにトルコ系の学校である Light Academy Secondary で勤務している人がいて、一度、その教職員のパーティに誘われたことから、話が盛り上がり交流事業へと発展した。2014年度の終わりに日本人スタッフと校長と Light Academy を訪れ、相手校の教頭と交流の仕方を模索した。学校の規模や学年も違うので、方法については、日本人学校は中学生、Light Academy 側は最も下級生にあたる9年生（日本の学齢では中学2年生）に焦点を絞った。その後、Light Academy 側からも日本人学校への訪問もあり、交流に向けての準備にとりかかった。ただ、お互いの日程から話しが立ち消えそうになりかけたが、2学期中に English の講師陣と相談して、こちらから働きかけてみた。案を練って、Light Academy に English 講師陣と一緒に出かけ、詳細案について提示し、日程もお互いの条件が合う日で決定した。3学期が始まって、すぐの活動であったが、自分たちができることを考えながら取り組むことにした。学期が始まって、2週間という限られた時間ではあったが、今までの財産であるものを披露できるように取り組みを始めた。約1時間半という限られた時間であったので、6年生の先生とも相談し、演目を決定した。①太鼓披露、②剣道デモンストレーション、③日本語や文化に関するプレゼンテーション、④ドッジボールによるスポーツ交流とした。それぞれ役割を決め、①については中学生、②については6年生、③についてはそれぞれグループを半分に分けた。④は全員でという分担をした。



交流日までの時数が5時間しかなかったが、それぞれの役割をしっかりと果たし、準備万端でその日を迎えた。子どもたちにとって、近代的なステージで発表できたことや、いつもとは違う人たちの前に立てたことがいい経験になった。太鼓の発表で、聴衆を感銘させ、剣道では体験コーナーも設け、プレゼンでは質問コーナーもあったりと、終始和やかな雰囲気時間が過ぎていった。また、そのお返しに Light Academy 側からトルコダンスの披露があった。最後のスポーツ交流では、混成チームを作り、中学生にルールを説明させ、体験させた。相手にとっては、初めての競技だったようで、Light Academy の体育の先生も興味深くこの活動を眺めていた。ゲーム中は、お互いに協力し合いながら、親交を深めた。最後に、双方あいさつをして、この活動を終了した。



この交流では、Light Academy の教職員がとても感銘を受けていたようで、Light Academy 主催のマルチカルチャー・フェスティバルに参加してくれないかとの打診もあった。また、Light Academy の教頭との話の中で、日本とトルコは友好的な歴史を持ち合わせているので、今回のイベントはその意味でも意義のある取り組みであったと話してくれた。また、子どもたちからも「大成功の交流だった」との感想が寄せられた。



(4) 修学旅行での Nyeri Primary School との交流

この年の修学旅行は、盛りだくさんの内容であった。日本人技術者による MIAD 施設（米に関する施設）での稲刈り体験や、アスレチック体験、ケニア山トレッキングに、植樹体験など思い出に残るイベントが2泊3日の日程に組み込まれていた。

その修学旅行の最終日に交流学习を現地の Nyeri Primary School をお願いした。事前準備として、単なる学校見学での交流にはしたくなかったため、こちらからダンス交流を持ちかけた。日本人学校サイドでは、全国的に広まった私の地元稚内の「南中ソーラン」を踊ることにした。奇しくも、その時期に中学部では、ボランティア学習でソーランの取り組みを行っていたので、その過程で、6年生にも教えることとなった。このソーランは数人の生徒が、日本に住んでいたときも体験していたようだったので、今回は、スタンダードの南中ソーランに取り組んだ。この取り組みに当たっては、一時帰国の際に、現任校をお願いして、自分自身も踊れるようにと、何度か練習に参加させてもらった。また、教え子も在籍している地元のソーラン連のビデオを撮らせてもらい、それを参考にしながら、ソーランの取り組みに入った。限られた時間の中での取り組みなので、このような踊りを日本人の同世代の子どもたちは習っているといった設定にした。

当日は、最初に学校施設や寄宿舎施設を見学させてもらった。ここの学校は、植民地時代にイギリスによって設立されたもので、ケニアの公立学校にしては、近代的だと感じた。また、見学の中で、同年代の子どもたちの、住環境にびっくりしつつも、置かれた立場を理解した。自分たちの暮らしとは大きく違うが、ここに通う子どもたちはケニアの中流層で、ここよりもひどい環境で通う子どもたちが半分以上いるということもわかった。ただ、学習に関する取り組みについては、感心したようで、一日3時間以上も寄宿舎で勉強し、TVの視聴は、日曜日の数時間しか限られていないということに驚いていた。

交流では、12歳の学年の選抜された女子が十数名集合した。そこでは、お互いに踊りを披露して、2回目はそれぞれの踊りを一緒に踊るというものであった。今回は、踊りの後に交流タイムを設けて、自己紹介などで、同世代同士の話が盛り上がっていた。



(5) キリマニ校との交流

日本人学校では、カレン地区に移転する前に、近隣校であったキリマニ校との交流学习を行っていた。カレン地区に移転してからも、その交流は続け、運動会や学習発表会へ招待し、交流活動を行った。

① 2013年度

1年次のこの年の運動会では、体育教師に教わりながらの取り組みであった。内容がどのようなものであるか、つかめなかったため教わりながらの活動となった。競技種目とチーム分けに関しては、ほとんど体育科の先生と日本人スタッフにいただいた。今ひとつ把握できないまま、当日を迎えたが、例年言われていることがはっきりとわかった。当日になって、ドタキャンする子や、名前が違う子などさまざまであった。また、運動会という行事がなく、ルールなどを最初から教えなければならなかった。特に、徒競走ではレーンを守るという概念がなく、アウトコースの子が、勝手にインコースに入ってくるなどのトラブルも続出した。その度に、英語と片言のスワヒリ語を駆使しながら、説明にあたった。ここで、私が学んだのは、説明には堪能な英語力が必要なのではなく、体などを使って説明した方がわかってくれるということだった。私自身、ほとんどキリマニ校につきっきりであったが、徐々に、相手側も慣れてきて、質問をしてくれるなど、最終的には自分の指示が通るようになった。



この運動会の競技を目の当たりにして思ったのは、身体能力では圧倒的にキリマニ校が有利であった

が、団結力が必要な運動では、日本人が勝っていたと感じた。綱引きなどの競技では日本人児童・生徒と力を合わせることもあり、勝利したときにはお互いに喜びを分かち合っていた。

② 2014 年度

この年度の運動会ではキリマニ校担当の先生が日本に留学していることもあり、担当が代わった。自分も2年次であったので、体育科の先生に迷惑を及ぼさないように、チーム分けや出場種目分けを行った。案の定、名前が違ったりとのハプニングがあったしたが、臨機応変に対応できた。また、昨年の反省を生かし、徒競走のレーンはキリマニ校児童を内側にするなどの工夫をしたが、それでもコース通りに走ってこなかった子もいた。大縄跳びでは、この日のため大縄を日本人学校から借りて数日前から練習していた。その成果もあってか、昨年と違って数回跳べるようになっていた。また、綱引きや二人三脚などの日本人と一緒に競技でも、息を合わすことを覚えたようで、この年度の運動会は、昨年度の反省が生きていたと感じた。



③ 2015 年度

キリマニ校の担当であった先生が、日本留学から帰国したこともあり、キリマニ校の子どもたちも安心して参加した。こちらからの説明も、そんなに多くを語らなくてもよく、彼らが理解するのに早かった。今回はキリマニ校の参加先生の数も3名となり、関心の度合いも大きくなってきた。この年から、キリマニ校が参加できる競技を増やし、最初の大玉転がしから参加させた。日本人の子どもたちとも息を合わせながらさまざまな競技に参加し、いつもならルールが把握できずにいた競技も、その先生の努力もあってか、例年よりもトラブルが減った。ただ、例年に比べ、運動神経が強うそうな子の参加が少なく、今まで圧倒していたリレー競技では、最下位に落ちてしまったが、子どもたちも先生たちも、終始、運動会を楽しんでいたようだった。



〔5〕ウガンダ巡回指導

ナイロビ日本人学校では、年に一度、隣国のエチオピアとウガンダに巡回指導のプログラムがある。私は、2014年度にウガンダへ3日間派遣され、巡回指導にあたった。参加児童生徒は13名で、中には日本語がほとんどできない生徒もいた。その巡回指導を開催するにあたって、日本語での会話ができる児童生徒については、日本で行われている授業内容に沿って、複式で学習指導を行うことにした。また、日本語での会話が難しい児童生徒については、海外青年協力隊の方々の援助も受け、初歩的な日本語を学ばせた。また、全体の授業として日本の体験的な文化活動を行い、日本についての理解を深めることを目標とした。指導するにあたって、日本語の能力及び学年を考慮したグループに分け、国語、算数・数学、社会を中心に学習をする計画を立て、実践した。また、日本語を使いながら理科の実験や習字も行った。日本文化体験の時間では、初日にテーマを決めて折り紙作りを体験させた。二日目には、北海道でのアイヌ民族の楽器であるムックリを紹介し、実際に音を聞いた。その後、南中ソーランをビデオ紹介し、数回ほど踊りに挑戦した。

この活動の3日間、児童生徒たちはとても楽しく参加して、もう1日ほしいという声があがっていた。ウガンダでは日本人学校もない上、補習校もないので、日本人の子どもたち・保護者の方々が集まる機会が少なく、巡回指導がとても貴重な機会になっていることがわかった。日本の教育に接する機会は、今回の巡回指導でしかなく、このプログラムがウガンダで暮らす子どもたちにとってとても貴重な場であることも認識した。



〔6〕日本人会ソフトボール部とのつながり

ナイロビに来てからは、日本人会の方々には大変お世話になりました。特に、私が所属していたソフトボール部の人たちと、日本人学校とのつながりは深く思い出に残る取り組みであった。ソフトボール部では、主に、日本人会同士の試合や、アメリカ大使館チームなどの交流戦、ケニアの若者チームとの野球の交流試合などの活動が主であった。

日本人学校では、過年度にジャリブ活動や土曜日に野球やソフトボールをしていたということもあり、子どもたちの野球への意欲が以前からあった。治安上、外で遊ぶことが限られているナイロビで、子どもたちの体力向上のために役立ちたいと思い、自分なりのやり方で、この活動を続けようと考えた。



①海外青年協力隊の支援でのジャリブ活動

ソフトボール部での初の活動は、ケニア青年チームとの野球の試合だった。そこで、出会ったのが、ケニアで野球を指導している協力隊の方だった。その場で、日本人学校でのジャリブ活動での講師を依頼して、活動が実現することとなった。年齢的にも近い協力隊の方の参加で、子どもたちの野球に対する意欲がさらに湧いた活動になった。翌年度からは、ケニアへの野球派遣がなくなってしまったが、野球のジャリブ活動は継続し、子どもたちに野球の楽しさを教えることができた。



②日本人会ソフトボール部との交流

2年目からは、ソフトボール部に所属する PTA の方々の支援もあって、月に一度の割合で、ソフトボールの交流戦を開くことができた。回を重ねるうちに参加者も増え、日本人学校の子どもたちと、日本人会の方々との交流も活発になった。また、ソフトボール部の大人から指導を受けていくうちに、子どもたちの技術的な成長ぶりも見られ、女の子の中には「ソフトボール楽しい」「今度はいつ?」といった声も上がった。さらに、インター校に通う子どもたちも参加してくれて、笑顔あふれる交流の場ともなった。

また、ソフトボール部の若手から上がった声で始まった、ソフトボール部+ナイロビ日本人学校の大 BBQ 交流会も開催することができた。子どもたちとソフトボールをしながらの大交流会には、多くの人たちが集まり、大人や子どもの双方にとっても思い出に残る企画となった。この会を開くにあたっては、ソフトボール部をはじめとした人たちの協力があり、終了後はお互いを讃え合っていたのが印象的でした。この活動は翌年もあり、参加者は 50 名以上となり、一大イベントの 1 つともなった。



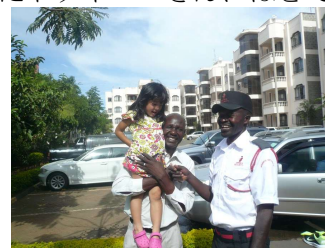
3. ナイロビでの生活

治安が悪く、テロの恐怖があると言われるナイロビでも、安全に十分に気をつけていれば、楽しく暮らせた。ナイロビには多くのショッピングモールがあり、アフリカとは思えないぐらいの近代的な街だった。年々、開発が進み、多くのビルが建ち並ぶようになり、それに合わせて物価も上昇はしているものの、野菜や果物は日本と比べると、かなり安く手に入る。特に、市場や地方に行けば、信じられないぐらいの値段で売っていた。また、最近では日本食レストランも増え、日本の食材もこだわりがなければ、不自由することはなかった。



(1) お世話になったケニアの人たち

多くの日本人はナイロビで生活していく上で、ドライバーやメイドなどの使用人を雇う。それは、不慣れた土地での生活に欠かせない存在でもあり、ケニア人の雇用を守るという意味でもある。私たちのナイロビ生活では、家事を手伝ってくれるメイドさんや車の運転をしてくれたドライバーさんにはとてもお世話になった。使用人ということで、給料を払って雇っていたが、娘も含めた全員、いつも尊敬の念を抱きながら接していたおかげで、治安の悪いと言われるナイロビで何不自由なく暮らすことができた。むしろ、私たち家族にとって最高の生活を送ることができた。また、アスカリと呼ばれる門番さんたちにも、家族のように接してもらい、留守の間でも気にかけてくれ、安心してナイロビの生活を満喫することができた。



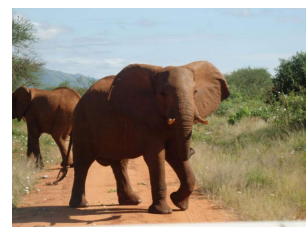
(2) さまざまな日本人とのつながり

ケニアという土地柄、さまざまな活動をしている人たちと知り合うことができた。ケニア各地で活躍する海外青年協力隊や、ケニアに日本の技術を伝える JICA などの人たち。また、ストリートチルドレンを救うボランティア活動をしている方。ケニア・タンザニアの国境の町で、ケニアの人たちのために保育園を開いた方。象牙の密猟者からアフリカ象を守る活動をしている方。ケニアの森を守ろうと活動している方。恵まれない子どもたちやスラム街で暮らしている子どもたちのために学校を設立した方々など、多くのケニア在住の日本人から話を聞く機会があり、多くのことを学ばせてもらいました。自分の生きてきた価値観や人生観を改めて考えさせられた経験でもあり、この人たちと出会えて、ケニアに来て本当に良かったと思えた。



(3) ケニアといえばサファリ

まとまった休みなどにはサファリに出かけた。いくつかの国立公園に出かけ、野生動物を探すゲームドライブを楽しんだ。日本ではお目にかかれない、象、キリン、ライオン、サイ、レオパードなどの動物に出会うことができた。特に、ケニア山やキリマンジャロ山を背景とした動物たちのシルエットは絶景であった。ただ、その動物たちも、環境の変化と密猟の横行で、その個体数も年々減っているのも実情である。



4. おわりに

ナイロビで過ごした3年間は、私にとって貴重な時間過ごせた時だった。見る物が全てが新鮮で、人生観を変えてくれた3年間だった。自分が持っていた考え方や価値観を変えてくれた。出会った人たちによって、初めて知らされた日本とは別の世界。この世界観を、自分だけでなく、子どもたちとともに分かち合いたいと思い、さまざまな体験学習や交流学习を企画した。私の思いは、「ケニアに住んでみてわかること」「ケニアでしかできないこと」を体験させることで、子どもたちの生涯の財産になってほしいということだった。さまざまな活動で、子どもたちがいつも笑顔で取り組んでいたのが印象的だった。これらの活動を通して、成長していく姿を感じ取った。

最後に、その活動の実現のために、尽力してくれた現地日本人スタッフや現地講師陣にワーカーさんたち、並びに日本人会の方々には感謝の言葉を言い尽くせないぐらいの思いがある。この3年間で学んだ経験を、日々の教育実践に役立てたいと思う。